

## 第66号 「ノーサイド」

3回続けてのラグビーネタです。

肉体と肉体のぶつかり合いであるラグビーは、テレビで観戦していても凄い迫力を感じます。自分はプレーに参加しているわけでもないのに、気が付くと自分の身体に力が入ってしまいます。自分もスクラムやモールに参加しているような錯覚に陥ってしまうのです。このように、プレーヤーとの一体感を感じることができるのがラグビーの大きな魅力だと思います。しかし、私のような「にわかファン」が増えた原因は、これだけではないはずです。

ラグビーには、「One for all, all for one（一人はみんなのために、みんなは一人のために）」という精神があります。自分を犠牲にしてもトライのためにボールをつなぐという考え方は、もう一つが「No side（ノーサイド）」の精神です。試合が終われば自陣と敵陣のサイドはなくなるという意味です。激しくぶつかり合い、時には感情が高まって小競り合いがあったとしても、試合が終われば必ず健闘を称え合う。本当に美しい姿です。我々はこの二つのラグビー精神を自分の生活に結びつけることによって共感し、感動したのだと思います。

ところが、ラグビー用語で試合終了を意味する「ノーサイド」という言葉を使うのは、今や日本だけだということを知りました。ラグビーの本場イングランドでも1970年代までは使われていたようですが、現在は試合終了のことを「フルタイム」と言うのが一般的だそうです。では、なぜ日本にだけ「ノーサイド」という言葉が残ったのでしょうか。ある説によると、松任谷由実が1984年にリリースした「ノーサイド」という曲が関連していると言われています。

1984年1月7日に行われた第63回全国高等学校ラグビーフットボール大会の決勝戦、天理高校対大分舞鶴高校で、後半ロスタイムに大分舞鶴がトライを決めて18対16まで迫り、ゴールキックを決めれば同点で両校が優勝となる場面を迎えようとしていました。しかし、このゴールキックを大分舞鶴の主将が外し、無情にもその直後にノーサイドの笛が鳴ったのです。この試合をテレビで見ていた松任谷由実が、フィールドに立つ高校生の姿と勝負の残酷さに心を揺さぶられ、「ノーサイド」という曲が完成したそうです。そしてこの曲が、「ノーサイド」という言葉を日本人の心に浸透させたと言われています。

言葉としての「ノーサイド」は使わなくなったとしても、精神としての「ノーサイド」はすべてのラグーマンに残っています。日本大会を機に、もう一度「ノーサイド」という言葉が世界で復活してほしいと願うのは私だけでしょうか。

様々な心を見つめ直すきっかけとなったラグビーに感謝します。